

稲葉 3人の先生方のご報告でさまざまな疑問点等を出していただいたのですが、おそらくそれを議論すると30分から45分は絶対かかるので、疑問点はとりあえず脇に置いて、私から大きな質問を提示させていただき、それに3人の先生方にお答えいただいて、その後フロアから質疑あるいはコメントをいただくという形にしたいと思います。既にお話しいただいたことに重なる部分もあると思いますが、考えておられていることを簡潔にお答えいただければと思います。

まず若林先生、安田先生に関しての質問です。両先生は、現時点では混合研究法ということで研究されておられるわけではないので、あるいは量と質を両方収集して統合するということを目指されているわけではないのでお伺いしたいのですが、午前中の抱井先生、八田先生のご講演にあったような混合研究法を、若林先生、安田先生の研究に適用することが有益なのか、あるいはあまり現時点ではメリットがなかなか感じられないのか、もしそれに障害、課題、疑問などがあるとしたらどの辺りか、ということをお伺いできればと思います。

それから春日先生への質問も先にお伝えします。既に混合研究法を実践されておられるので、少し踏み込んだ質問です。現在の研究の成果を発表される時に、午前中の講演にあった量的データと質的データの「ジョイントディスプレイ」、あるいは両方のデータを視覚的に統合して成果を表現することをされておられるのかを教えていただければと思います。また、もしまだ取り組んでおられなければ、どのような手段だったら統合の結果をわかりやすく表現できるのかといった見通しについて、もし何か考えていることがあれば簡単にご紹介いただければと思います。では若林先生からお願いします。

若林 混合研究法が有益かどうかということに関しては、スライドの中でも少し触れさせていただいたのですけれども、基本的には有益なものであるというふうに認識しています。ただ自分がやっている研究、僕の場合は質的なアプローチを加えていくということが、情報量として豊かになるということは間違

いないわけですが、先ほどの哲学的な視座であれ方法論的な、要するに世界を見る窓とおっしゃっていたような気もするのですが、そういったものが重なっていない中で急にそれを持ち込むことの危険性はあるのではないかと思います。要するに、簡単にやっつけられるのかということの疑問のほうがちよっと大きいのでやっつけていない、ということがたぶんあると思います。

ただ、もちろんそういうふうに総合的に、僕なんか質と量の違いというのは肉と骨みたいな関係かなとよく思うのですが、要するに基礎的な部分を量的に固めて肉付けしていくような作業が質的だなと私の中では思ったりするので、やはりそういった意味では両方がうまく併存できるような、共存できるようなアプローチというのは有効かつ有益であろうというふうに思います。

稲葉 ありがとうございます。では安田先生、お願いします。

安田 有益だとは思いますが、むしろこの混合研究法という枠組みをいただいて、それぞれのプロジェクトで実施されているコホート研究という事項を持ちながら、それぞれがやっていることを統合するというふうなことが大事であるという視点をもらった感じはしているのです。ですので、混合研究法という枠組みは有益だと思います。

ですが、混合研究法を使うためには、プロジェクト内での、相当頭を付き合わせての調整とか勉強が必要かなと思っていて、最初のデザインのところでそういったベースがなかったのも、やればいいという話でもない気もしております。

一方で、稲葉先生から疑問を提示してくださった、量と量のミックスとありますが、これはミックスと言わないのかもしれないのですが、これは心理学でやっぱり大事かなというところと、あと指標と質問紙、このミックスはやっぱり大事だと思います。それはお伝えしましたように、ちょっとしたことで指標が変化するというところも含めまして、やっぱり統合的に見ていくことがむしろ大事かなというふうに思っています。ありがとうございます。

稲葉 では春日先生お願いします。

春日 ジョイントディスプレイ的に表せるかどうかということですよ。

稲葉 それを考慮しておられるかどうかということです。

春日 このお話をいただくまでは全く考えていませんでした。実際ちょっと考えてみたときに、私の場合はインタビューを元にして尺度を作っているという形なのですから、このまま一方通行でいたら、たぶんジョイントディスプレイ的なというか、混合研究法的にはたぶんならないと思います。というのは、メタ推論というか、最終的に一方通行で終わってしまっていると思います。ただし、今後のこととして思っているのが、ジョイントディスプレイ的に視覚的に表していくためには、おそらく質的研究と量的研究を、ある程度交互に行うといったことが必要ではないかと考えます。

例えば尺度を開発した後、じゃあどうするかと言ったときに、新たにインタビューをとるということもありうるのですが、ちょっと立ち返ってみて、それで本当に全部がざっくりと「知恵」だと言ってしまっているのか。分けていくのであれば、もう一回インタビューの結果を見直して、いくつかのパターンがあるのであれば、それと同じように量的になるのかといったような感じで、ちょっと照合していく形でやっていけば、最終的にジョイントディスプレイ的に表していくこともできるのかなというふうに思いました。

稲葉 少なくともジョイントディスプレイ的に表すことが、研究上は有効、あるいは発信手段として有効だと思っておられるということでしょうか。

安田 たぶん有効というよりも、私としては、まずお話を聞いていく中で、あるいは自分で勉強した中で思ったのが、考え方を整理するというか、頭の整理とかのためにすごく重要なポイントなのかなと思っています。例えば、視覚的に表すという枠組みがない状態で研究していると、最終的にどこに行き着くかという結論の部分というのが、例えばメタ推論なんか特にそうだと思うのですが、そこに行く着くためにやはり分けて考えていくというのが有効なのかなと思っています。そのためにも、そういう思考の過程を知らせるために

ジョイントディスプレイは有効なのかなと、読者に知らせるためには有効なのかなと思っています。

稲葉 どうもありがとうございました。ますます私の最後の閉会の挨拶を短くしようかなという気になっているのですが、5分ぐらいもう少し続けて、最後の私の挨拶を5分ぐらいにして4時になんとか終わりたいと思います。

本当はフロア全体というか質問・コメントを受け付けたいところですが、時間がありませんので、また登壇者の先生方から疑問点も出していただいたりしていたので、その辺りも含めて午前中講演された抱井先生、八田先生にちょっとコメントをいただければと思います。では八田先生の方からよろしいでしょうか。なにか今までの3人の先生方の発表についてコメントでも質問でも結構です、いただけますでしょうか。

八田 お三方の発表を興味深く聞かせていただきました。もともとは混合研究法を想定していなかったプロジェクトに混合研究法を使う際、どこまで混合研究法のエッセンスを加えるのか、それがポイントなのかなと思いながらお話を聞いていました。

私が個人的に思うことをまず述べますと、必ずしも混合研究法に合わせる必要はないのではないかと思います。といいますのは、研究を実践に役に立てるということと実践的な研究に混合研究法を用いることは、似て非なるものだと考えているからです。現場に還元するために何か新たな知を得たり手法やツールを開発しなくてはならないのであれば、ぜひ混合研究法を使って頂ければと思います。目の前のクライアントとの関係を常に考慮しなくてはならない実践家がデータを収集する前提にあると、収集するデータはその実践家を通したものになります。質であれ量であれ、データにはこのような文脈の影響の出やすいものと出にくいものがあり、これが分析や考察を方向付けることもあるでしょう。ですので、場合によっては、実践と距離をおいたデータ収集の検討が必要になるかもしれません。目の前の実践に重きが置かれる場合、どうしても影響の出にくいデータを得ることが難しいような場合、収集するデータの特性に注意することが、混合研究法のエッセンスと言えるかもしれません。

ついでですので、一言だけ。若林先生のお話で、統合はどのレベルで行われるべきか、というような問いがあったかと思うのですが、今日の抱井先生のお話では、Philosophy、Method、Methodology という三本柱で統合を捉えるお話がありましたように、実際には統合というのは、さまざまなディメンジョンで行われます。リサーチクエスションのディメンジョンであったり、フィロソフィであったり、サンプリングであったり分析手法であったり、結果の提示であったり。この点についてはJMMRに書かれていますので、もしご関心があればそちらのほうをご参照いただければと思います。以上です。

稲葉 どうも貴重なコメントありがとうございます。それでは抱井先生、何かコメントでもご質問でもいただければと思います。

抱井 お三方の発表、大変興味深く拝聴いたしました。ありがとうございます。春日先生のみ混合型研究をされているというようなお話を稲葉先生が先ほどされましたけれども、私は、お三方ともまさに混合研究法的な要素を持った研究をされていると思います。

安田先生の場合は、まさに私がGreeneの古典的な論文をもとに、混合研究法の目的ということで5つ紹介させていただいた最後の拡張というところ、そこにあたる研究をチーム・アプローチでされていたかと思います。

チーム・アプローチですということに対して、先ほど安田先生の方からコミュニケーションが大切というところ、あるいは難しさというところ、そこが出ましたけれども、まさにそうなのです。チーム・アプローチが混合研究法では実は推奨されているのですよ。全ての人がエキスパートになれるわけではないので、ぜひコラボレーションをしてくださいということをおっしゃっているのです。

その場合別の問題が起きてくる可能性があって、それがまさにコミュニケーションなのです。実際にJMMRの方にも論文が出ているのですが、このコミュニケーションの中で、今度パラダイム論争みたいなものが起きる可能性もあって、その場合は往々にして量的研究者の声が大きくなるというような問題も実際にあります。しかしそれは我々の混合研究法のコミュニティが望ん

でいるような形ではないので、1 + 1 というような、イコールな関係になるような形で量と質の研究者がコミュニケーションを進めていく必要があるのかとに思います。

それに関係して、若林先生の方から質問が出ていました、チーム・アプローチでやること自体が混合研究法と言えるのかというようなご質問だったのですけれども、まさにチーム・アプローチでも混合研究法です。

春日先生のようにお一人でやっている、私もそうですけれども、博士論文、学位請求論文などは一人でやらなければいけない。その場合、混合研究法をやるときの特有の問題というのがあって、特にどのタイミングで2つのデータを収集するかというところで、労力の問題もありますけれども、時間的な問題というのがあるのです。先生も順次デザインを使っていましたよね。私は探索的ではなくて説明的順次を使ったのですけれども、まさに順次デザインを使って一人でやりましたので、量の分析をすべて終えて、さあ次に質のためのサンプリングをやりましょうといったころには、質的研究の参加者候補の一部がなくなってしまうというような、そういう問題がありました。一人で混合型研究を実施される場合は、労力と時間の問題というのがあるかと思うのです。

その辺りで、また若林先生の質問に関連してくるのですけれども、一つの形態のデータを、じゃあ例えばインタビューデータを量的に分析するというのが混合研究法とは言えないのかというお話があったかと思うのですけれども、実は午前中の私の発表の中で、混合研究法ってこれだけコミュニティが大きいのですよ、ということで皆さんにお話しさせていただいたのですけれども、まさにそういう一つの形態のデータを量的・質的に分析するのも混合研究法だとおっしゃる方たちもいらっしゃるのです。または、それを混合研究法とは呼ばたくない、でも混合型分析というふうに呼ぶことができるのではないかというふうにおっしゃっている方たちもおります。

例えば稲葉先生と私が提唱させていただいております GTxA というアプローチは、まさにその1形態のインタビューデータ、つまり質のデータを Grounded Theory Approach で分析しながら量的に Text Mining Approach でも分析するといった混合研究法の1つの形態をとっています。

最後2つですが、春日先生のご研究は探索的順次デザインにあたるものなの

ですけれども、最終的な目的というのが、やはり作った尺度、開発した尺度を使ってご自分で仮説検証なり、新たな変数間の関係を見るところ、そこまで繋げるというのが今後のお話ですよね。そのときにジョイントディスプレイを作る予定があるのかというご質問に対して、すごくいいことをおっしゃったのです。量と質の分析結果を整理するというので、ジョイントディスプレイというのが使えるというようなことをおっしゃった。まさにそうで、今までジョイントディスプレイというのは、若林先生がおっしゃっていたように、質と量を一本のペーパーに収めるということは文字数的にすごく無理があるんじゃないかというお話がありましたよね。それを解決する1つの策としてジョイントディスプレイというのが生まれたというところもあるのです。ですから、もともとは報告のツールとしてジョイントディスプレイが開発されたのですけれども、今はまさに春日先生がおっしゃったように、分析や、データを収集する上での計画というのにも使えるということですので、整理をするためのツールというふうに解釈していただければよろしいかと思います。

これが最後です。若林先生が、混合研究法を今使うことに対して懸念がある部分として異なる窓・パラダイムのものを1つに統合することがそもそもできるんだろうか、とおっしゃった。そこがまさにパラダイム論争で議論されたことなのです。そこを乗り越えるために、プラグマティズムという哲学的なパートナーを見つけてきて、プラグマティズムであればそういったメタなお話ですよ、そういう存在論だの認識論だのっていう哲学的な話というのはちょっと横に置いておいて、知識の有用性ということ、そこを一義的に考えることによって、両方を使うことを有りにしましょう、というところで落ち着いたところがあるかと思います。以上です。

稲葉 貴重なコメントをありがとうございました。私の時間配分が悪くて大変申し訳ございません。基本的に終了時間になってしまったのですが、いま事務局に確認したらちょっとであれば延ばせるということですので、もうちょっとだけお付き合いいただければと思います。

せっかくなので、フロアの方々にぜひここで言っておきたいとか聞いておきたいということがあったらいただければと思いますが、いかがでしょうか。特

になれば3人の登壇の先生方から何かございますでしょうか。

若林 すみません、いろいろとお答えいただきまして大変ありがとうございます。プラグマティズムがそれを繋ぐところになるというのは、非常に私自身納得ができることでありましてすごく勉強になったなと思います。

1つ気になっていることがあって、先ほど抱井先生と稲葉先生が共同で行われている、ちょっと名前は失念しましたが分析スタイルがあって、GTAとテキストマイニングですかね。そのテキストマイニングが量的研究であるというふうな解釈でよろしいのですか、その場合は。

稲葉 それはGTxAという方法です。テキストマイニングによって定量化を行い、統計学的分析をするという意味では量的研究を含んでいます。少し背景からお話しします。逐語録みたいなインタビューデータをまず人間が読んで、グラウンデッド・セオリーに基づいてカテゴリー等をどんどん導き出して、カテゴリー関連図を作ったりするとやっぱり人間ですから読み飛ばしたり変な解釈をしたり、あるいはオーバージェネレーションやオーバー・インタープリテーションが起きる可能性があります。それらを検証するために、同じデータをテキストマイニングでもう一回同じようにコーディングしてみるという方法です。そういう意味ではテキストマイニングを量的なデータを出す手法として使います。逐語録に対してコンピュータのオートコーディング機能を適用し、カテゴリーを出して、それを人間が導出したものと比べると、だいたいずれているのです。あれ、全然合わないなということになったときに、なんで合わないんだろうと思って、もう一回人間がやったコーディングを見直して、コンピュータのコーディング結果と見比べると、人間が見落としていた部分や、本来違うコードをつけるべきところなどが見えます。そういう自己反省ができるのです。それで、人間のコーディングの仕方や、コンピュータのオートコーディングのルールを変えたりしながら、コンピュータと人間がある意味で対話しながら分析をすると、最終的に納得できるコード化やカテゴリー関連図に落ち着くことができるという、そういう方法論です。

そういう意味で、本当に単純化すればテキストマイニングを量的な方法とし

で使っているといえは使っています。言葉を量化した結果と、もともとの人間が行ったコード化の結果を比べながら、ちょっとループが入りますけれども、お互いそれぞれチェックし合いながら良くしていくというようなアプローチです。

若林 ありがとうございます。ちょっと僕の認識というか、心理学の中でテキストマイニングをやるとなったときに、これは量的と言うのかといわれると、あまりそうじゃないというニュアンスがあるのです。なんとなく質的な分析をただ数値化して処理するという、そういう発想のほうで聞いていたので、たぶんこの感覚の違いみたいなものも領域ごとにあるのかなとは思っていますが、何かちょっとこの点が気になったので確認させていただきました。

稲葉 一応私たちがやっている GTxA というのは質的研究主導型混合研究法、だから質の研究をよりしっかりした結果にもっていくためにコンピュータを使っている、量的なデータを使っているという感じです。

では安田先生何かございますか。

安田 どうもありがとうございました。チーム・アプローチで行うことを保証していただけたようで、すごく心強いです。やっぱり対人援助を考えるときに、対人援助って大きいのですけれども、本当にいろんな複雑なことがある中でやっぱり1人ではできないし、そこで質的・量的なアプローチが本当に必然的に必要になってくるわけで、そういったことが1人ではできない。繰り返しますが、1人ではできない中で、みんなでやっていける。それがまさに混合研究法の目指すことの1つだと言っていたら、すごく心強く思いました。

ただし、それをやる中でやっぱりコミュニケーションが大事です。コミュニケーションをやっても論争があるというところを改めて客観的にお示しいたげて、本当にそうだなといいますか、何か自分の中で「えっ、そうじゃなくって」みたいな感覚も含めて思いまして、やっぱりこれまで来た歴史に学ぶというような視点を1つ頭に入れてコミュニケーションをやっていけるといいな

と、すごく思いました。どうもありがとうございました。

春日 では一言だけ。いろいろとコメントをありがとうございました。あと、この機会を与えていただいてありがとうございます。

先ほど GTxA ですかね、何かそれが結構革新的だなと思って、あっ混合研究法ってそんなふうにも使えるんだなと思いました。私は今回 grounded theory だけをやったのですけれども、確かにそのテキストマイニングと照らし合わせると、確かにちょっとあーというところがあるかもしれないなというのは思いました。そういった意味でも、特に概念の検討みたいなことになってくると、言葉というのを解釈する人間が特に重要になってくる。でも過大解釈をしてしまうと本来の意味から離れてしまうというのもあるので、先ほど八田先生のお話で、混合研究法に必ずしも合わせる必要はない、ということがありましたけれども、私の研究関心の中では、かなり混合研究法というのは今後すごく使っていけるのではないかなというふうに思いました。ありがとうございました。

稲葉 どうもありがとうございました。ではとりあえずパネルとしてはこれで終了とさせていただきます。私のコメントを一言だけさせていただきます。今回のパネルは混合研究法として人間科学研究所がすばらしい成果を上げたという、そういうことを紹介する場ではありません。私は、混合研究法はそもそも、複雑な現象の理解、あるいは社会変革や社会的な改善のために研究をするというアプローチだと思っています。そして、人間研にとっては非常に有用なツールになりうること、また、人間研の中には混合研究法を用いることに適した良いテーマや素材がたくさんありそうに思えたことから、混合研究法の紹介と議論をさせていただきたいなと考え、このパネルを企画させていただきました。

そして今日の議論でも、私が思っていた通り、人間科学研究所の中には、混合研究法でアプローチすることに有効な課題、あるいは有効な研究の枠組みというのがたくさんあるなということが分かったことは大変よかったです。

今後、混合研究法を用いて最初からデザインし、現在取り組んでいる問題に迫っていくというアプローチもあり得ると思います。同時に、混合研究法学会の「コロキウム」という研究会で廣瀬先生という臨床心理士の方から紹介されたのですが、一つの問題にいろんな方法や視点を試しながら10年近く経過した結果、全体として混合研究法の枠組みで新しい知見が得られたという方もいらっしゃいます。ぜひ今後、対人援助や人間科学研究の中で、単にデータを採って終わりとか、分析して終わりということではなく、変革あるいは社会改善に向かう方法として、混合研究法、あるいは混合法的な発想というものを、人間科学研究所の中でも使っていきながら、これだけ社会のためになる研究をしたんだよということを発信できるようなことができればと思っています。

ということで、とりあえずパネルとしてはこれで終了とさせていただきます。ご登壇の先生方、どうもありがとうございました。